

日高郷土史年表

一 前松前藩時代（一五九〇～一七九八）

藩主	年号	西歴	記	事
第八代 松前氏廣 (一六三三～一六六六)	寛永一〇 寛永一二 正保元	一六三三 一六三五 一六四四	金山奉行を置いて東蝦夷地「ケノマイ」「シビチャリ」より砂金を発掘した。 函館の人佐野仙右衛門が幕府の許可を得て様似で漁業を営んだ 東金山（今の様似）でキリスト教徒児玉喜佐衛門が捕われ江戸に送られた	
第九代 松前 高廣 (一六六六～一六八八)	慶安元	一六四八	シャクシャインがオニビシの部下を斬殺、染退と波恵の対立が六年におよぶ	
第十四代 松前 章廣 (一七二七～一七五七)	寛政一〇	一七九八	ロシヤ蝦夷地入り調査のため、幕使大河内善兵衛が東蝦夷を巡回して様似に来る 近藤重蔵が様似に通ずる約三里の山道を開きくした	

二 前幕府直轄時代（一七九八～一八二二）

第十四代 松前 章廣	寛政二 一七九九	幕府は東蝦夷地の内浦河以東を七年に限って措置することとした 様似・庶野に旅宿所または通行屋と称するものを設置した 幕吏、浦河、様似両場所に穀物・野菜を試作し牛馬を配した 幕府は幌満に臨時造船所を設置して大船数隻を造った 佐藤嘉右衛門によって稻荷神社が創立された（現在の浦河神社） 様似に等瀨院が建てられた（秀暁開基） 幌泉郡内百人浜に一石一字の碑がたてられた 島屋佐兵衛がえりも岬にえりも神社を建立した
享和元	一八〇一	
文化元	一八〇四	
文化三	一八〇六	
文化二	一八一四	

文政元 一八一八

南部の人庄兵衛が三石漁業場所の請負人となり、昆布を集荷し三石昆布と名づけた

三 後松前藩時代（一八二二～一八五四）

第十四代 松前 章廣	文政四 一八二二	幌満において水田を試み収穫した
第十五代 松前 良廣 (一八二七～一八五七)	天保二 一八三一	高田屋金兵衛、密貿易の嫌疑をうけ江戸に送られた

四 後幕府直轄時代（一八五五～一八六七）

第十七代 松前 崇廣 (一八六六～一八八八)	安政四 万延元 一八五七 一八六〇	浦河地方に牧馬場を開設した 日高産馬事業のはじまりである 沙流場所ので投石による昆布の増殖法が発明された
------------------------------	----------------------------	---

五 開拓使時代（一八六九～一八八二）

長官	年号	西歴	記	事
清水谷公考 鍋島 直正 東久世通禧	明治二 明治四 明治五 明治六 明治七 明治八	一八六九 一八七一 一八七二 一八七三 一八七四 一八七五	蝦夷は北海道と改められ、当地方は日高国と称した 東静内に益習殿を開設した（小学校のはじめ） 浦河郡西舎、杵臼に長崎、熊本県の農民が移住した 浦河支庁が設置された。三好清篤が支庁長に就任 浦河支庁が設置された（この頃より狼の被害が多くなった。） 新冠牧場が設置された 北垣国道が支庁長に就任 浦河支庁が廃されて札幌本庁の直轄となった 三石村に郵便局が開設された 三石戸長役場を設置（管内最初のものである）	

官			長
年	号	西	歴
明治一〇	一八七七		幌泉に小学校が設置された
明治一二	一八七九		郡区町村編成により、浦河に郡役所を設けた
明治二三	一八八〇		山田謙が郡長に就任
明治二四	一八八一		沙流郡各村戸長役場、静内新冠両郡戸長役場、浦河外三村戸長役場、様似外五村戸長役場、幌泉外八村戸長役場が設置された
			赤心社を設立し浦河郡に開懇を計画した
			赤心社第一回の移民が弘明丸で来浦（始めて日高に汽船が来た）

六三 三鼎時代（一八八二—一八八五）

西郷 從道	明治一五	一八八二	開拓使が廢され函館・札幌・根室の三県が置かれた。日高は札幌県に所属
調所 廣文	明治一六	一八八三	浦河に治安裁判所が設置された
	明治一七	一八八四	新冠牧場が宮内省の所轄となった 幌泉に電信局が設置された 河田保が郡長に就任

七 北海道庁時代（一八八六～一九四七）

岩村 通俊

明治一九 一八八六

北海道庁が設置された

浦河外十郡役所を設置（浦河・三石・様似・幌泉・広尾・当縁・十勝・中川・河西・河東・上川）

苫小牧に勇払外五郡役所を設置（勇払・白老・千歳・沙流・新冠・静内）

辰野宗城が郡長に就任

河島 醇	杉田 定一 園田 安賢	安場 保和	原 保太郎	渡辺 千秋 北垣 国道	永山武四郎
明治三九	明治三三	明治三〇	明治二七	明治二四	明治二三
一九〇六	一九〇二	一九〇七	一九〇四	一九〇一	一九〇〇
三石村・様似村・幌泉村と呼称し二級市町村制が施行された	浦河村と呼称、二級町村制が施行された	北海道庁が浦河港修築の再調査を実施した	浦河郡役所が創立した	エリモ燈台が設置された	古川浩平が郡長となる
明治一四	明治一三	明治一二	明治一一	明治一〇	明治〇九
一九〇三	一九〇二	一九〇一	一九〇〇	一九〇〇	一九〇〇
浦河郡役所を廃して浦河支庁を置いた	浦河に税務署、区裁判所が設置された	佐藤志郎が第二支庁長となる	栗津九郎が第三支庁長となる	平取外八村戸長役場が設置された	西忠義が第四支庁長となる
日高実業協会が組織された	浦河村と呼称、二級町村制が施行された	北海道庁が浦河港修築の再調査を実施した	浦河郡役所が創立した	エリモ燈台が設置された	古川浩平が郡長となる
明治一四	明治一三	明治一二	明治一一	明治一〇	明治〇九
一九〇三	一九〇二	一九〇一	一九〇〇	一九〇〇	一九〇〇
浦河郡役所を廃して浦河支庁を置いた	浦河に税務署、区裁判所が設置された	佐藤志郎が第二支庁長となる	栗津九郎が第三支庁長となる	平取外八村戸長役場が設置された	西忠義が第四支庁長となる
日高実業協会が組織された	浦河村と呼称、二級町村制が施行された	北海道庁が浦河港修築の再調査を実施した	浦河郡役所が創立した	エリモ燈台が設置された	古川浩平が郡長となる
明治一四	明治一三	明治一二	明治一一	明治一〇	明治〇九
一九〇三	一九〇二	一九〇一	一九〇〇	一九〇〇	一九〇〇
浦河郡役所を廃して浦河支庁を置いた	浦河に税務署、区裁判所が設置された	佐藤志郎が第二支庁長となる	栗津九郎が第三支庁長となる	平取外八村戸長役場が設置された	西忠義が第四支庁長となる
日高実業協会が組織された	浦河村と呼称、二級町村制が施行された	北海道庁が浦河港修築の再調査を実施した	浦河郡役所が創立した	エリモ燈台が設置された	古川浩平が郡長となる

長官	年号	西歴	記	事
石原 健三	明治四〇	一九〇七	日高種馬牧場が設置された	
山之内 一次	明治四一	一九〇八	高江村外一〇村戸長役場が設置された	
山之内 一次	明治四二	一九〇九	新様似水銀鉱山が発見された	
中村純九郎	明治四三	一九一〇	門別村、静内町と呼称、二級町村制が施行された	
西久保弘道	大正元	一九一二	村本初太郎が第五代支庁長となる	
俵 孫一	大正二	一九一三	浦河村より萩伏を分離	
笠井 信一	大正三	一九一四	川越常次郎が第六代支庁長となる	
	大正四	一九一五	苫小牧、佐瑠太間の鉄道が開設された	
	大正六	一九一七	根室銀行支店を浦河に設立した	
	大正八	一九一九	浦河に電灯がとる（火力による）	
	大正九	一九二〇	関崎不二夫が第七代支庁長となる	
	大正一〇	一九二二	浦河林務署が設立された	
			浦河に一級町村制、町制が施行された	
			浦河町に電話が設置された	
			那須正夫が第八代支庁長となる	
			右左府村戸長役場が設置された	
			日東クローム鉱業株式会社が創立された	
			近藤喜寛が第九代支庁長となる	
			有限責任浦河信用組合が発足（後の日高信用金庫）	
			小林哲太郎により日高民報が発刊された	
			浦河港修築工事に着手した	
			高井幸次郎第一〇代支庁長となる	

宮尾 舜治	大正一一	一九二三	様似トンネルが完成した	
土岐 嘉平	大正一二	一九二三	右左府村、平取村、新冠村と呼称し二級町村制が施行された	
中川 健三	大正一三	一九二四	乗合自動車国道が通うようになった。	
澤田 牛麿	大正一四	一九二五	静内に一級町村制が施行された。	
池田 秀雄	大正一五	一九二六	佐瑠太・厚賀間に鉄道が開通した	
佐上 信一	昭和一二	一九二七	吉田正二が第一一代支庁長となる	
	昭和一三	一九二八	北海道銀行浦河支店が設置された	
	昭和一四	一九二九	浦河に測候所が設置された	
	昭和一五	一九三〇	厚賀・静内間に鉄道が開通した	
	昭和一六	一九三一	茶谷幸一が第一二代支庁長となる	
	昭和一七	一九三二	浦河漁港が竣工した	
	昭和一八	一九三三	門別に一級町村制が施行された	
	昭和一九	一九三三	守谷榮清が第一三代支庁長となる	
	昭和二〇	一九三三	日高電燈株式会社が発足 三石、静内に点灯	
	昭和二一	一九三三	森本正雄が第十四代支庁長となる	
	昭和二二	一九三三	静内に町制が施行された	
	昭和二三	一九三三	浦河支庁を日高支庁と改称した	
	昭和二四	一九三三	岩知志、右左府村間の沙流川右岸道路が竣工した	
	昭和二五	一九三三	永山政能が第一五代支庁長となる	
	昭和二六	一九三三	幌泉港が完成した	
	昭和二七	一九三三	煙草専売局が浦河町に設置された	
	昭和二八	一九三三	静内、三石間に鉄道が開通した	
	昭和二九	一九三三	前田豊次郎が第一六代支庁長となる	

長官	年号	西歴	記	事
池田 清	昭和九	一九三四	横似漁港が竣工した	
	昭和一〇	一九三五	幌満に第一発電所が完成し、日高全町に送電することになった	
	昭和一二	一九三七	三石、浦河間の鉄道が開通した	
石黒 英彦	昭和二三	一九三八	日高線、横似まで全線開通	
半井 清	昭和二四	一九三九	浦河公共職業安定所が設立された	
戸塚九一郎	昭和二五	一九四〇	三石に一級町村制が施行された	
坂 千秋	昭和二七	一九四二	日本赤十字浦河病院が開院した	
熊谷 憲一	昭和一九	一九四四	古屋裕が第十九代支庁長となる	
持永 幸男	昭和二一	一九四六	右左府村を日高村に改称した	
増田 甲子七	昭和二二	一九四六	横似・広尾間バスが運行した	
岡田 敏文	昭和二三	一九四六	浦河健康相談所が保健所として新発足した	
田中 敏文	昭和二四	一九四七	大塩礼が第二〇代支庁長となる	
	昭和二五	一九四八	吉田栄吉が第二一代支庁長となる	
	昭和二六	一九四九	平取に一級町村制が施行された	

八 北海道時代（一九四七）

知事	年号	西歴	記	事
田中 敏文	昭和二二	一九四七	土橋武士が第二二代支庁長となる	

町村 金五	昭和二三	一九四八	日高総合開発期成会が全道各地にさきがけて結成された	
	昭和二四	一九四九	川崎久輝が第二三代支庁長となる	
	昭和二五	一九五〇	日高東部地区（えりも全域と横似の一部）が道立公園に指定された	
	昭和二六	一九五一	三石に町制が施行された	
	昭和二七	一九五二	佐々木茂一が第二四代支庁長となる	
	昭和二八	一九五三	門別、横似に町制が施行された	
	昭和二九	一九五四	長沢豊太郎が第二五代支庁長となる	
	昭和三〇	一九五五	平取に町制が施行された	
	昭和三一	一九五六	前野穰が第二六代支庁長となる	
	昭和三二	一九五七	佐々木延男が第二七代支庁長となる	
	昭和三三	一九五八	浦河町と荻伏村が合併	
	昭和三四	一九五九	日高電源開発工事が始まる	
	昭和三五	一九六〇	幌泉に町制が施行された	
	昭和三六	一九六一	鈴木勘蔵が第二九代支庁長となる	
	昭和三七	一九六二	新冠に町制が施行された	
	昭和三八	一九六三	加畑長一が第三〇代支庁長となる	
	昭和三九	一九六四	日高に町制が施行された	
	昭和四〇	一九六五	農業構造改善事業がはじまる	
			安田貴六が第三一代支庁長となる	
			国鉄富内線が日高町まで開通した	
			中山忠衛が第三二代支庁長となる	
			日勝産業開発道路（日高町・清水町間）が竣工した	

知事	年号	西歴	記	事
堂垣内尚弘	昭和四一	一九六六	沿岸漁業構造改善事業がはじまる	
			産業開発道路（日高町・夕張間）が着工	
	昭和四二	一九六七	産業開発道路（日高縦貫道路）が着工	
			山田光男が第三支庁長となる	
	昭和四四	一九六九	阿部悟郎が第四支庁長となる	
			産業開発道路（浦河町・大樹町間）が着工	
	昭和四五	一九七〇	渡辺邦雄が第五支庁長となる	
			幌泉町がえりも町に改称した	
	昭和四六	一九七一	日高広域生活圏計画が策定された	
	昭和四七	一九七二	川端武史が第三六代支庁長となる	

あとがき

日高支庁開庁百年記念事業の一環として、世紀にわたる日高の歴史に筆をとることを依頼された。もとより菲才の私が百年の記録をものすることは容易でなく、加えて短期間と紙数の制約があっただけに一層その難しさを覚えた次第である。

しかし私は明治末期日高の地に生をうけ、日高の自然と人文にはぐくまれて今日に至った。

それだけに日高を愛する執念が、自らを鞭打って敢えて世紀の歴史と取り組ませたのであるが、しかしその過程において幾回となく不明の苦しみを覚えてならなかった。

けれども、こゝに喘ぎながらも漸く完稿を見て一応その責任を果たしたわけである。

さて、私は起稿以来常に念頭にあったことは、一つの時代を築くことはその時代の舞台に登場して主役を演じた人材もさることながら、これを支えたその時代の民衆の協力によるものと考えるのである。従ってこれ等民衆の隠然たる力を忘れるようでは創業・拓殖・開発の歴史を没却し時代を知らざるものと言わざるを得ない。

又、それと同時に日高の動きは北海道の動きが中核をなすもので言わば同心円の存在としての軌道を描いているものであると考えらる。

従って常に視野をひろげて日高を常に眺めることを忘れてはならないことである。

叙述もとより粗漏、錯誤は逃れないだろうが、私の見識がこうした観点を大切にしていることを知っていただければ幸である。

終りに、種々激励下さった川端支庁長をはじめ、各種資料の提供にご協力を願った日高支庁職員、何かと労を煩わした支庁内総務課の葛西係長並に幅口主事に対し、巻末をかり心から謝意を表する。

昭和四十七年十二月

日高文化史研究会主幹 畑中武夫

昭和四十八年三月発行

日高のあゆみ

発行者 北海道日高支庁

印刷所 共和印刷株式会社

旭川市九条通十五丁目